

日本語母語場面における終助詞「よ」の一考察 —発話連鎖効力に基づく分析枠組みの試み—

A study of the sentence-final particle *Yo* in native Japanese conversations —attempt of approach from the sequence perspective—

崔 英才 (千葉大学, 人文社会科学研究科)

Yingcai CUI (Chiba University,
Graduate School of Humanities and Social Sciences)

Abstract

To explore a new approach of the sentence final particles, we selected "Yo", which appears at the end of sentences, as our target final particle in this study. Starting from the modality function of grammatical aspects with the final particle "Yo", we attempted to incorporate a new concept of sequence for classifying the function of "Yo". According to our results, there were three chain types existed in the "Yo" sequence based on different chain type of "Yo" functions: 1) the recognitions and acceptances for conclusions, 2) the description developments for alerting, and 3) the objections for performing a "self-assertion" against the others. Previous studies have only focused on the functional classification of "Yo" based on the sentence level, which was hard to fully understand the function of "Yo". In contrast, our study focused on the discourse level to uncover the unknown function of "Yo".

1. 研究動機

終助詞は日本語の大きな特徴の一つで、その役割は非常に大きい。その中でも「よ」と「ね」は聞き手に対して話し手が発話の状況をどのように認識し、聞き手にどのように伝えようとしているのかを表す伝達態度のモダリティ(益岡 1991)として、コミュニケーションにおいて重要とされる。

終助詞「よ」「ね」に関する既存研究は多くあり、その分析の視点もさまざまである。中でも終助詞が持つ文法的側面に焦点を当て、その意味用法を解明しようとした研究蓄積は大変多い。しかし、未だに説明しきれていない部分が残されていることがしばしば指摘されている。特に話し言葉において現れる終助詞にも関わらず、実際の会話を対象にした研究はまだ少なく、著者による作例や小説等、書き言葉を対象にした研究のほうが圧倒的に多い。そのため終助詞研究はどうしても文レベルにおける分析に留まりがちである。日本語の話し言葉の一特徴として実際の会話の中で働く終助詞の機能として「よ」「ね」を捉え直す必要があると思われる。

本研究は(崔 2015a)で試案したアプローチに従い、終助詞「よ」を取り上げて考察する。終助詞が持つ発話連鎖効力(後述)による発話連鎖の特徴に注目し、談話上における「よ」の機能分類を行う。相互行為である会話の中で話し言葉の特徴として終助詞「よ」の働きを捉え直すことで、先行研究の文レベルでは説明し切れなかった部分を補うことを目指す。

本稿の構成は次のとおりである。まず先行研究における終助詞「よ」の基本的意味用法を確認し、それに基づく発話機能の分類を取り上げる。本研究のアプローチを説明し、その意義を述べる。先行研究における終助詞「よ」の説明を再検討し、その問題点を指摘するとともに、本研究のアプローチとデータを用い、考察を加える。まとめに「よ」の発話連鎖効力による発話連鎖の特徴、及びそれに基づく機能分類を提示する。

2. 先行研究

終助詞「よ」の研究は「ね」に比べると断然少ない。「よ」の多くの研究は「ね」との比較の中で研究される場合が多い。「ね」は文末終助詞の機能以外に間投用法(「あのうね」、「ちょっとね」)、感動詞用法(単独の「ね」)等複雑な用法として用いられる。それに比べると「よ」は主に文末に用いられ、「ね」ほど複雑な仕組みを有していない。そのため「よ」は主には情報伝達における「注意喚起」の機能として認識されがちである。しかし、これは「よ」の機能を会話という相互行為の中で十分に捉えた結果なのだろうか。文レベルを超え、談話上における機能として「よ」を捉えた場合に「注意喚起」の説明で足りるのだろうか。

2.1 終助詞のモダリティ機能

終助詞「よ」は「ね」とともに命題内容に対する伝達態度のモダリティ(益岡 1991)として捉えられる。益岡(1991)による「よ」「ね」の捉え方は大曾(1986)に引き継ぐ部分が多い。本研究では益岡(1991)・大曾(1986・2005)による「よ」の捉え方を参考にする。

大曾(1986)と益岡(1991)では「よ」と「ね」を相互対立するものとして扱い、それぞれ以下のように述べられている。

「ね」が原則として話し手と聞き手の情報、判断の一致を前提とするなら、「よ」は逆に話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提にしているようだ。(大曾 1986)

「ね」と「よ」という形式が内在的意味として表すのは、自分が有する知識の意向のあり方と一致する方向にあるのか、それとも対立する方向にあるのかという点に関する話し手の判断である。(益岡 1991)

大曾(2005)では一層考察を加え、「よ」に関して以下のような指摘がなされている。

「ね」は話し手と聞き手の情報の一致を前提とし、「よ」は話し手と聞き手の間の情報の食い違いがあるときに現れるとしたが、(一部中略)この記述では「よ」の一面しか捉えていない。(一部中略)「よ」は「話し手が自分の情報、判断、主張、意思などを聞き手に明示的に伝える」機能を持つと考える。話し手が自分の持つ情報等を聞き手に明示的に伝える必要がある場面が2つ考えられる。

まず、聞き手がある情報を持っていないと話し手が判断した場合である。この場合は状況から聞き手はこの情報を必要としていると話し手が判断した場合と、単に自らの情報を相手に明示的に伝える場合がある。後者の場合は、話し手の情報、判断等の一方的な提示になり、自己主張が強すぎると受け取られることがある。

2つ目は、話し手が聞き手と自分の判断が異なることに気づき、自分の判断を聞き手

に明示的に伝える必要があると判断した場合である。(大曾 2005)

以上の大曾(2005)で指摘される「よ」の特徴から、「よ」で終わる発話の発話機能を認定することができる。

一つ目の前者「聞き手はこの情報を必要としていると話し手が判断した場合」に用いる「よ」は「知らせる、気づかせる」発話機能の「よ」とする。

後者の「単に自らの情報を相手に明示的に伝える場合」に用いる「よ」は「一方的に伝える」発話機能の「よ」とする。

二つ目の「話し手が聞き手と自分の判断が異なることに気づき、自分の判断を聞き手に明示的に伝える必要があると判断した場合」に用いる「よ」は「反論する」発話機能の「よ」とする。

まとめると終助詞「よ」の発話機能は以下の3つとなる。

- 1)知らせる・気づかせる「よ」
- 2)一方的に伝える「よ」
- 3)反論の「よ」

既に述べた通り益岡・大曾による終助詞の研究は文レベルに留まり、上でまとめた「よ」の発話機能もそのような問題点を持つ。実際の会話の中で「よ」の働きを説明するにはこの分類では不十分なところがある。

2.2 終助詞の発話連鎖効力

多くはないが、近年の研究の中には終助詞の機能を、文レベルにおける命題内容に対する伝達態度のモダリティ機能に留まらず、より長い談話レベルにおいて多角的に果たす機能として捉えようとする研究が見られる。

本研究で参考にした西郷(2012)は終助詞の機能を文レベルから談話レベルに拡大し、談話上において果たす機能として捉えようとした研究と言える。

西郷(2012)では終助詞「ね」「よ」「よね」は聞き手に適切な発話での応答を指令する「発話連鎖効力」を持つとし、その発話連鎖効力による後続発話の連鎖を中心に、終助詞「ね」「よ」「よね」の機能を捉えようと試案している。西郷(2012)の主張からは終助詞「ね」「よ」「よね」の後続発話の連鎖は何らかの特徴を持つことが示唆されている。本研究では西郷(2012)が提案する「発話連鎖効力」の概念を参考にしたい。

西郷(2012)では終助詞による「発話連鎖効力」はその後の発話連鎖に影響することを述べており、「ね」「よ」「よね」の後続発話についてのみ言及している。しかし、文末が終助詞で終わる発話は、先行発話と深く関わる場合がある。本研究では文末が「よ」で終わる発話の後続発話だけでなく、その先行発話も含めて捉える。本研究における「発話連鎖効力」は西郷(2012)の概念を先行発話まで含めて拡大したものである。

3. 本研究のアプローチ

本研究では終助詞の機能分析の新たなアプローチを考案する目的で、終助詞「よ」を分析対象にする。先行研究における「よ」の機能分析を批判的に捉え、発話連鎖の観点を取り入れることで終助詞「よ」の談話上における働きを考察することを目的とする。

3.1 データ

分析するデータは宇佐美まゆみ監修(2011)の「BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト)」より抜粋した2者間の会話4例¹⁾、総82分の音声を文字化したデータである。

データのうち3例は初対面、1例は友人同士の会話となる。「年齢」「親疎関係」「性別」の組み合わせは統一されていない。終助詞の使用は「年齢」「親疎関係」「性別」によって影響されると指摘されるが、機能そのものの研究には差支えがないと思われる。

4例の会話に出現した文末の終助詞「よ」の数は90回をのぼった。

3.2 分析の手順

1)まず文末が「よ」で終わる発話を抽出する。以後、「よ発話」と呼ぶ。説明の利便性のために「よ発話」を発した話者を「話し手」、「よ発話」を受ける話者を「相手」と呼ぶ。

2)「よ」の発話連鎖効力による先行発話、後続発話の発話連鎖の特徴を分析する。

先行発話、「よ発話」、後続発話といった一連の発話の連鎖においては、順番交代²⁾が起きる場合もあれば、順番交替が起きず順番が維持される場合もある。「よ」の発話連鎖効力による発話連鎖の特徴を捉えるためには、話者の順番交替の有無や相づち発話の有無にも注目する必要がある。

4. 分析と考察

まず大曾(2005)の「よ」の事例を抜粋し、再検討することで、説明が不十分な部分を指摘する。その後本研究の会話データを用い、更に分析と考察を加えることで本研究のアプローチによる「よ」の機能分類を行う。

大曾の例は説明するに必要な部分のみ切り取って掲載する。事例の番号は原文通りにする。なお、大曾の例には発話番号がなかったため、説明に当たる発話には下線を引く。終助詞「よ」は原文の太字のままにする。

本研究のデータは説明対象となる「よ発話」は網掛けし、「よ」の部分は太字にする。発話連鎖を特徴づける先行発話・後続発話には下線を引く。データの中の文字化記号は本文の中で省略する場合がある。

4.1 知らせる・気づかせる「よ」

以下は大曾(2005)の例(7)の一部である。

(7)(ベルギーに住んでいたという話)

SE2: いい町だった?

WA1: いい町だったよ.

SE2: あたしね、言いたいよ、ぜひおじちゃんがいる、いる、いるうちに。

WA1: あっ、ほんと.

SE2: うん.

上の例(7)で SE2 の「いい町だった?」の情報要求を受け、WA1 は「いい町だったよ」と情

報提供の発話に「よ」を用いている。このような「よ」について大曾は「聞き手がこの情報を必要としていると話し手が判断した場合」に用いられる「よ」、即ち発話機能でいうと知らせる・気づかせる「よ」の機能を持つ。

大曾では言及されていない筆者が下線を引いた「よ発話」の後続発話 SE2「あたしね、言いたいよ、ぜひおじちゃんがいる、いる、いるうちに」に注目されたい。SE2はこの発話で新たな話題を開始している。SE2は先行発話 WA1の「いい町だったよ」の情報提供を受け入れるとともにその話題を終了させ、自分から新たな話題を開始している。

以下大曾(2005)の例(6)も上の例(7)と同じ知らせる・気づかせる「よ」の事例である。

(6)SE2: 髪の毛についているよ。

WA1: <笑い>ありがとう。

SE2: 衣みたいなのが。

例(6)は髪の毛に何かついてる WA1 をみた SE2 が、それを本人に知らせる・気づかせる必要があると判断し、「髪の毛についているよ」と情報提供する場面であると想定される。ここで SE2 は相手から求められておらず、自ら情報提供を行う発話に「よ」を用いている。WA1 は「<笑い>ありがとう」と言いながら髪の毛についている異物を取ったのであろう(あるいは SE2 が取ってあげたかもしれない)。つまり、SE2 による「髪の毛についているよ」という情報提供は、相手の受け入れとともに、異物を取る行為を促し、その状況(先行文脈)を終わらせている。

上の例(7)と例(6)の発話連鎖の特徴を示すと以下の通りである。

例(7): 相手の先行発話(情報要求)⇒話し手の「よ発話」(情報提供)⇒相手の後続発話(受け入れと新たな話題展開)

例(6): 相手の先行文脈(WA1 の髪に何かついてる状況)⇒話し手の「よ発話」(情報提供)⇒相手の後続発話(受け入れと取る行為の展開)

例(7)と例(6)で示される通り、知らせる・気づかせる「よ」は話し手が相手の先行発話^mに対し、情報提供する際に用いられる。話し手は「よ」を用いることで相手に情報の受け入れを要請し、その受け入れを持って現在の話題(やり取り)をまとめようとする発話連鎖の特徴が見られている。

例(7)は相手から求められて情報提供を行う発話に「よ」が用いられた。例(6)は相手から求められておらず、話し手自ら情報提供を行う発話に「よ」が用いられた。いずれ相手に知らせる・気づかせる必要があると話し手が判断し、情報提供を行う際に「よ」を用いている。この点においては大曾(2005)の「聞き手がこの情報を必要としていると話し手が判断した場合」に用いられる「よ」という説明で足りるかもしれない。しかし、2つの事例における話し手の「よ発話」を発することで相手の受け入れを要請し、その受け入れを持って現在の話題をまとめようとする「よ発話」以降の後続発話の特徴や、相手の行動に対する「よ」の働きは一切説明されていない。

先行研究による知らせる・気づかせる「よ」の解釈は、先行発話や命題内容に基づいた考察となる。しかし、話し手の伝達態度を表すモダリティとして最も肝心な「よ」による話し手の伝達態度が相手にどのように伝わり、相手にどのような働きをしているのかについては十分に

考察されていない。そのため「よ」には知らせる・気づかせる発話機能があるという説明だけでは、話し手がなぜ「よ」を用いて相手に情報提供するかという話し手の意図を、談話上で十分に説明することができない。上で筆者が指摘した発話連鎖の特徴をみると「よ」は相手の先行発話から相手の後続発話に至り、談話レベルにおいて働きがあることが分かる。このような働きは、本研究で提案する終助詞が持つ発話連鎖効力から生まれるものとして捉える。

以下本研究のデータを用いて、更に考察を進めていく。

事例①：「名前の漢字について話す場面」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
10	10	*	J2	え、「J1の名前」っていうのは、真実の「真」に(み…)、「美しい」ですか？。
11	11	*	J1	はい、真実じゃないほうです、み、みが。
12	12	*	J2	あ、はいはいはいはい、あ、そうそう、真実の人もいますもんね。
13	13	*	J1	うん、そうなんです。
14	14	*	J2	うん。
15	15	*	J1	よく間違っ、手紙とか来ますよ<笑い>。
16	16	*	J2	あー、なるほど。
17	17	*	J1	うん。
18	18	*	J2	でも「J1の苗字」はその点、多分間違えようがな、ないですよね<{}>。
19	19	*	J1	<あ、ない>{}>ですね<笑いながら>。

事例①は J1 の名前の漢字について話す場面である。

15 行目の「よ」が知らせる・気づかせる「よ」に当たる。

事例①の 10 行目で J2 は J1 の名前の漢字について「真実の真に(み...)美しいですか」と聞き、11 行目で J1 は「真実じゃないほうです、み、みが」と答えている。J1 の名前の漢字に関する確認が終わり、15 行目で J1 は「よく間違っ手紙とか来ますよ」と自分の名前にまつわる出来事を伝え、「よ」を用いている。その後の 16 行目の J2 の「あー、なるほど」という受け入れの発話が見られる。17 行目で J1 は「うん」の相づちを打つのみで、15 行目による「よく間違っ手紙とか来る」という話題をそれ以上展開しない。一方、18 行目で J2 のほうが発話権を取って「でも J1 の苗字はその点、多分間違えようがな、ないですよね」を新たな話題を開始している。

事例①の 15 行目の J1 の「よ発話」は相手からの情報要求を受けていない。それにも関わらず一方的に情報提供をしている。この点に基づくと次節 4.2 で考察する一方的に伝える「よ」の用法として捉えることもできよう。

しかしながら、連鎖の特徴からすると J1 の「よ発話」の後続発話の連鎖、即ち J2 の「受け入れ」と「新たな話題の開始」をみると、上に載せた大曾の例(7)と例(6)と共通するのが分かる。

J1 の「よ発話」は相手 J2 の「受け入れ」を持って、今までの名前の漢字に関する話題を終了させようとするものと捉えることができる。

終助詞は話し手の伝達態度を表すモダリティである。「よ」の機能を捉える際には話し手側だけを見るのは十分ではない。相手に対する話し手の伝達態度の表出は、その伝達態度を受ける相手側の行動をみる必要がある。のみならず相手の行動を受けてからの話し手の行動も「よ」の意図を分析するのに必要である。

「よ」の発話連鎖効力による先行発話・後続発話の連鎖の特徴を分析してみると、話し手が「よ」を用いる意図には、単に相手に知らせる・気づかせるために留まるものではないことが浮き彫りになる。「よ」を用いる意図には相手に対し受け入れを要請することで現在の話題をまとめようとする話し手の意図も含まれ、これも「よ」の機能の中に組み込む必要があることを主張したい。

以上のようなアプローチを用いて本研究では「よ」の発話連鎖効力による発話連鎖の特徴から談話上における「よ」の働きを捉えていく。

では本研究における一つ目の「よ」についてまとめる。

上の事例分析で指摘した「よ」の発話連鎖効力による発話連鎖の特徴を連鎖タイプ I と名付け、連鎖タイプ I の特徴を持つ「よ」を「よ I 類」として以下のように定義する。

終助詞「よ」による連鎖タイプ I は、相手の先行発話を受け、相手の後続発話を導く連鎖となる。

したがって「よ I 類」は、まとめるための認識受け入れ要求の「よ」と定義する。

さらに、ここで先走りに述べておくと知らせる・気づかせる「よ」に分類された「よ」の中には、「よ I 類」に当たるものと、後述する「よ II 類」に当たるものがある。

4.2 一方的に伝える「よ」

以下は大曾(2005)の例(8)の一部である。

(8) (一緒にした旅行の話)

SR1: なんかさ、最初泊まったところは一、(うん)アリがいっぱいいなかった?

KN2: アリだけ。

SR1: 確かさ。

KN2: 私あれ、何だっけ、トカゲ?

SR1: あの、思い出したくもないよ。

天井にさ(そうそう)ぺたっといてさ、(そうそう)KH2 寝ちゃって一...(略)

上の例(8)は一緒にした旅行の話をしていて、宿泊先にトカゲがあったことが話題になっている。SR1 は「あの、思い出したくもないよ」と自分の記憶を伝える発話に「よ」を用いている。大曾(2005)に従うと、この「よ」は、一方的に伝える「よ」に分類される。確かに、相手から求められていない話し手自身に関する情報を提供する発話に「よ」が用いられるので、一方的に伝える「よ」として捉えることもできよう。

しかし、例(8)の筆者が下線を引いた SR1 の発話の部分を目ざして見ると、SR1 は「あの、思

い出したくもないよ」と発してから、「天井にさ(そうそう)ぺたっといてさ、(そうそう)KH2 寝ちゃって一...(略)」と、発話権を維持したまま説明を続けている。前節 4.1 で述べた大曾の例(7)と例(6)の「よ」は、相手に対して受け入れを要請する発話連鎖効力があつた。それと違って、例(8)の「よ」は相手に対して働くのではなく、話し手自身の後続発話を導き、話し手が発話権を握ったまま情報提供を続ける発話連鎖の特徴が見られる。

例(8)の発話連鎖の特徴をは以下の通りである。

(相手からの情報要求無し)話し手の「よ発話」(情報提供)⇒話し手の後続発話

この一方的に伝える「よ」はしばしば相手が情報、判断を有していない場合、自分の判断を伝えるのみで、相手に対する配慮がないため、押し付けがましい印象を生み出しやすいといった指摘がなされる。しかし、例(8)の話し手 SR1 の「よ発話」と、その後続く話し手 SR1 自身の説明展開の後続発話に注目すると、一方的に伝える「よ」は単に一方的に伝えるだけで終わるわけではない。話し手は「よ」を用いて一方的に伝えると同時に、その後更に説明を展開している。「よ」は話し手自身のその後の行動を相手に示す機能も担っているように思われる。

実際に本研究のデータからも一方的に伝える「よ」が多く見られた。

事例②：「JF01 が JM01 の実家から近い海の様子について聞く場面」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
74	72	*	JF01	もう、泳げ、るんですか?。
75	73	*	JM01	もう泳げます=。
76	74	*	JM01	=もう、来てますよ、たくさん、海水浴客も<>。
77	75	*	JF01	<あ、そうですか>{}[↑]、へー[↑]。
78	76	*	JF01	あ、もう(うん)泳げるんだ。
79	77	*	JM01	泳げますよ。
80	78	*	JM01	だってあと、今日は、7日、<ですよね>{}??。
81	79	*	JF01	<海の日>{}、までもうちょっとですよね[小声で]??。
82	80	*	JM01	海の日ー、は、もう海ーは、既に<軽く笑いながら>もうやってるって感じですよんね。

事例②は JF01 が JM01 の実家から近い海の様子について聞く場面である。

76行目の「よ」と79行目の「よ」は両方とも一方的に伝える「ね」に当たる。

74行目で JF01 は「もう泳げるんですか」と、JM01 の実家から近い海の様子について質問している。この質問を受け75行目で JM01 は「もう泳げます」と答えている。JM01 は答えてからその直後の76行目で「もう、来てますよ」と「よ」を用いて情報提供を続けている。この76行目の「よ」は直前の75行目の回答の後に、更に JM01 が一方的に情報提供を続けようとして用いる「よ」であるため、一方的に伝える「よ」に当たる。その後 JM01 は「たくさん海水浴客も」と更に情報提供を展開しようとするが、77行目の相手 JF01 の発話と重なり、一瞬発話を

取りやめる場面が見られる。しかしながら、79行目で「泳げますよ」と「よ」を用いて再度一方的な情報提供を展開している。80行目では、間合いを置かず「だってあと今日は7日ですよね」、82行目「海の日ーはもう海ーは既に〈軽く笑いながら〉もうやってるって感じですよんね」と情報提供を続けている。

以上の事例②も大曾の例(8)と同じく、一方的に伝える「よ」の場合、話し手は「よ」を用い情報提供してから更に詳しい説明を展開しようとする発話連鎖の特徴が観察された。つまり、話し手は「よ」を用いて情報提供するだけでなく、その後自分が行う説明展開を相手に示している。話し手のこの意図も「よ」の機能に組み込む必要があるのではないかと。話し手の「よ」の後の後続発話の連鎖を考慮せず、単に先行発話との関係から「よ」を一方的に伝える機能として捉え、「押しつけがましい印象」が生じやすいと解釈するのは「よ」の一面しか捉えていないことになる。

本研究のデータの事例をもう一つ紹介しよう。

事例③：「大学入試の日に着用した服について話す場面」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
191	174	*	J2	それだけで選んで受けてしまった。
192	175	*	J1	うんうん、へえ、そうなんだ。
193	176	*	J2	うん、そしたらなんか、うちの学校の先輩がいて(うん)、あれ[↑]、なんか声かけられた記憶があるな。
194	177-1	/	J2	あ、制服着て行ったんですよ,,
195	178	*	J1	あ、ああ。
196	177-2	*	J2	目立ちたがり屋だから。
197	179	*	J1	あはは<笑い>。
198	180	*	J2	制服を着ていったらいいかなって思ったら(うん)、声をかけられてくしまつて><。>

事例③は J2 が J1 に大学入試の日に着用した服について話す場面である。

194行目の「よ」が一方的に伝える「よ」に当たる。

194行目で J2 は「あ、制服着て行ったんですよ」と、直前の先行発話から外れた新しい話題として制服の話をする発話に「よ」を用いている。この J2 の発話は相手から制服に関する質問を受けてからの情報提供ではなく、話し手側からの一方的なものであるため、一方的に伝える「よ」に当たる。194行目以降の196行目と198行目の J2 の発話を見ると、全て194行目の「よ発話」における制服に関する情報提供の継続となっている。一方、その情報提供を受ける J1 の発話195行目「あ、ああ」、197行目「あはは<笑い>」をみると、J1 は相づち発話で受けるのみであることが分かる。

事例③も事例②と同じく一方的に伝える「よ」の後は、話し手自身による説明の展開が後続

されている。先行研究で一方向的に伝える「よ」に対する説明は、相手から情報要求が行われていないにも関わらず、話し手が一方的に自分自身に関する情報提供をする際に「よ」を用いたという点である。発話連鎖の特徴に基づき「よ」を捉えると、話し手の一方的に伝える「よ」を用いた後、「よ発話」の話題を引き続き展開する特徴は、「よ」の機能から外すことはできない。

本研究における二つ目の「よ」についてまとめる。

発話連鎖効力による発話連鎖の特徴を連鎖タイプⅡと名付け、連鎖タイプⅡの特徴を持つ「よ」を「よⅡ類」として以下のように定義する。

終助詞「よ」による連鎖タイプⅡは、話し手の「よ」による注意喚起により、話し手自身の後続発話を導く連鎖となる。

したがって「よⅡ類」は、説明展開のために注意喚起する「よ」と定義する。

もう一つ本研究のデータの事例を取り上げる。以下の事例④の62行目の「よ」は4.1の知らせる・気づかせる「よ」に分類される。しかしながら、発話連鎖の特徴は連鎖タイプⅡの特徴を有する。本研究では事例④における「よ」を「よⅡ類」の説明展開のために注意喚起する「よ」に帰類したいと考える。その理由を述べていく。

事例④：「就職活動について話す場面」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
60	55	*	UF04	就職活動の、後遺症みたいな…。
61	56	*	UF03	え、どういうことですか？。
62	57	*	UF04	私、メーカー病だったんですよ。
63	58	*	UF04	メーカー病、メーカー病になっちゃったっていうか、メーカー希望で。
64	59	*	UF03	はい。
65	60	*	UF04	メーカーだとCMとかすごいいっぱいやってるじゃないですか{<}。

事例④はUF04が自分の就職活動について話す場面である。

60行目でUF04は自分には就職活動に対する後遺症があると述べ、それを受けたUF03は61行目で「え、どういうことですか」と情報要求をしている。62行目でUF04は「私、メーカー病だったんですよ」と答える発話に「よ」を用いている。UF04の「よ」は相手からの情報要求があって情報提供する発話に「よ」が用いられている。つまり、上の事例②と事例③における一方的に伝える「よ」とは異なる。むしろ4.1の知らせる、気づかせる「よ」に分類されるべきである。

しかし、62行目のUF04の「よ発話」以降の後続発話を注目してみよう。UF04は「よ発話」の後、間合いを入れず63行目で「メーカー病、メーカー病になっちゃったっていうか、メーカー希望で」、また65行目では、「メーカーだとCMとかすごいいっぱいやってるじゃないです

か」と発話権を維持したまま情報提供を続けている。一方で、相手 UF03 も 64 行目で「はい」と相づちを打つのみである。このように事例④は連鎖タイプⅡの特徴の話し手の「よ」による注意喚起に引き続き、話し手自身の後続発話を導く連鎖となっている。

事例④で話し手は、相手の情報要求に対する情報提供の発話に「よ」を用いるが、その発話内容を相手に受け入れさせることでやり取りをまとめようとするわけではない。つまり、4.1 の「よⅠ類」では説明できない。むしろ話し手は「よ」を用い注意喚起することで、話し手自身のその後の説明展開を導くことに、より重点が置かれているように思われる。本研究ではこのような発話連鎖の特徴に踏まえ、事例④のような「よ」を連鎖タイプⅡの特徴を持つとし、「よⅡ類」の説明展開のために注意喚起する「よ」に帰類する。

4.3 反論の「よ」

以下は大曾 (2005) の例(9)である。

(9) (よく知らない人に話しかけられるという WA1 に)

SE2 : 話しかけやすい雰囲気なんじゃん。

WA1 : なのかね。

SE2 : うん。

WA1 : 困っちゃうね。

SE2 : いいよ。いいことだ。

例(9)では、知らない人によく話しかけられる WA1 に対し、SE2 は「話しかけやすい雰囲気なんじゃん」と褒めている。それを受けた WA1 は「なのかね」「困っちゃうね」と褒めに対して控えている。その後の SE2 の「いいよ。いいことだ」と、相手がマイナスに捉えている面を、逆にプラスに評価し、反論の「よ」を用いている。

大曾の例(9)はこの後の会話データが示されていないため、ここで「よ発話」の後続発話の連鎖の特徴をはっきり捉えることはできない。しかし、普段の会話場面を想定してみた時、相手の認識に対して反論する発話の後には、なぜ反論しているのかという「反論の延長」とでも言える理由説明を行うことがよくあるのではないか。SE2 は「いいよ。いいことだ」と自分の考えを示してから、その後引き続き WA1 が「話しかけやすい雰囲気」を持つことで、プラスになることを述べてもおかしくない。むしろそのほうがより自然に感じられる。

そこで例(9)の発話連鎖の特徴は、以下のようになる可能性を示しておく。

相手の先行発話→話し手の「よ発話」(反論)→話し手の後続発話(反論した理由説明)

次に、本研究のデータの事例⑤を用いて話し手の反論の「よ」の後のやり取りを中心に、更に考察を進める。

事例⑤：「UF03 が自分の大学生活について話す場面」

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
139	120	*	UF03	で、せっかく、なんかそういう、何て言うんですかね、は、んーと、大学ってこういうことをやるものだって思ったイメージに、近いことをしていた人なので、せっかくだったらもうちょっとこだわってもいいかなっていう(んー)程度なんですよね(あー)、私の場合は<笑いながら>。
140	121	*	UF04	あー。
141	122	*	UF04	うん、うんそういう方もいらっしゃっていいと思うんですよ。
142	123	*	UF03	<笑い>。
143	124	*	UF04	少しでもなんか、そういう気持ちがあるだけ、やっぱり私みたいなのとは<違うな>{<><笑いながら>。

事例⑤は UF03 が自分の大学生活について話す場面である。

141 行目の「よ」が反論の「よ」に当たる。

139 行目で UF03 は、自分はほかの大学生と違った拘りを持ち、自らの大学生活を否定的に捉えて話している。それを聞いた UF04 は 141 行目で「うん、うんそういう方もいらっしゃっていいと思うんですよ」と、相手のマイナスな考えをプラスに評価して反論の「よ」を用いている。この発話に対し 142 行目で UF03 は「笑い」で受けとめるが、発話順番は取っていない。一方、143 行目で UF04 は「少しでもなんか、そういう気持ちがあるだけ、やっぱり私みたいなのとは違うな」と、141 行目で相手に対して反論したことの理由説明を展開している。

反論の「よ」は、本研究の限られた会話データの中でごくわずかしは見られなかった。そのため断言することはできないが、日ごろ我々は相手に対して反論をする場合、その反論の意思を相手に受け入れさせようとしているのではないか。事例⑤の 141 行目の反論の「よ」の後に、142 行目で UF03 の「笑い」が見られる。この「笑い」は直前の「よ発話」の反論に対する受け入れとしてみることができよう。更に、反論の「よ」を用いる話し手の意図はここで終わるものではなく、反論の後の理由説明や自己主張が続く。つまり、反論の「よ」は 4.1 の連鎖タイプ I の相手の受け入れの後続発話を要請する連鎖の特徴と、4.2 の連鎖タイプ II の話し手の「よ」による注意喚起に引き続き、話し手自身の後続発話を導く連鎖の特徴を両方備えている可能性がある。

一方で、たとえ話し手が相手に反論する発話に「よ」を用いたが、その後反論に続く理由説明や自己主張がなかったと想定してみよう。そうすると、話し手は間違いなく相手に対し、反論の意思を強く押し付けることで、その場における意見の不一致に対し、決着を付けたかたに違いない。このような反論の「よ」は、連鎖タイプ I の特徴を持つことから、「よ I 類」のまとめるための認識受け入れ要求の「よ」として解釈することができる。

最後に本研究における三つ目の「よ」についてまとめる。

発話連鎖効力による発話連鎖の特徴を連鎖タイプ III と名付け、連鎖タイプ III の特徴を持つ「よ」

を「よⅢ類」として以下のように定義する。

終助詞「よ」による連鎖タイプⅢは、相手の後続発話を導いてから、更に話し手自身の後続発話を導く連鎖となる。

したがって「よⅢ類」は、相手に反した「自己主張」を行うために反論する「よ」と定義する。

5. まとめ

本研究では終助詞研究における新たなアプローチを模索するために、文末に付く「よ」を取り上げ分析した。終助詞が持つ文法的側面のモダリティ機能から出発し、新たな視点として発話連鎖効力の概念を取り入れ「よ」の機能分類を試みた。その結果「よ」発話連鎖効力によって3つの連鎖タイプが認められ、それに基づくそれぞれの「よ」の機能の定義を行った。以下表1にまとめる。

表1:「よ」の機能分類表

連鎖タイプ	発話の連鎖に基づく「よ」の機能
連鎖タイプⅠ 相手の後続発話を導く連鎖	よⅠ類 まとめるための認識受け入れ要求の「よ」
連鎖タイプⅡ 話し手自身の後続発話を導く連鎖	よⅡ類 説明展開のために注意喚起する「よ」
連鎖タイプⅢ 相手の後続発話を導いてから、更に話し手自身の後続発話を導く連鎖	よⅢ類 相手に反した「自己主張」を行うために反論する「よ」

崔(2015a)に引き続き、本研究では終助詞の談話上における働きを文レベルにおける文法的側面に留まらず、会話という相互行為の中で統合的に捉えることを目指したものである。既存の終助詞研究のアプローチでは捉えきれなかった「よ」の談話上における働き的一端を考察することができた。今後崔(2015a)による「ね」の結論と、本稿の「よ」の結論を基に結合型「よね」の考察を進めていく予定である。

参考文献

- 陳常好 (1987). 終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞 日本語学 6(10) 明治書院 pp. 93-109.
- 神尾昭雄 (1990). 情報のなわ張り理論—言語の機能的分析— 大修館書店
- 高民定 (2011). 日本語学習者の「よ」「ね」「よね」について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に 国際教育(4) 千葉大学国際教育センター pp. 11-23.
- メイナード (1993). 会話分析 くろしお出版

- 西阪仰編訳 (2010). 会話分析基本論集 世界思想社
- 益岡隆志 (1991). モダリティの文法 くろしお出版
- 大曾美恵子 (1986). 誤用分析 1 「今日はいいい天気ですね」－「はい、そうです」 日本語学 5(9)
pp. 91-94.
- 大曾美恵子 (2005). 終助詞「よ」「ね」「よね」再考－雑談コーパスに基づく考察－ 言語教育の展開 ひつじ書房 pp. 2-15.
- 崔英才 (2015a). 日本語母語場面における終助詞「ね」の一考察 千葉大学人文社会科学研究所 30(号) 印刷中
- 西郷英樹 (2012). 終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察：談話完成タスク結果を基に 関西外国語大学留学生別科日本語教育論集(22) pp. 97-118.
- 滝浦真人 (2008). ポライトネス入門 研究社
- 宇佐美まゆみ監修 (2011). BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版

ⁱ そのうち、2例は音声付きで、2例は文字のみのトランスクリプトである。

ⁱⁱ 「ターン交替」等他の言い方もあるが、本研究では順番交替という用語を使う。

ⁱⁱⁱ 事例(6)のように相手の先行発話がなく、相手に関する文脈のみ存在する場合もありうる。